

時を今につなぐあの日

明治5年(1872)7月1日、郵便取扱所が甲府柳町に創設された。近代的な郵便制度とともにほどなく為替事業も始め、同10年(1877)に甲府郵便局と改称。やがて甲府電信分局も併設された。



平成19年(2007)10月1日、日本郵政公社が民営化された。国が主導した郵政制度はその135年にわたる歴史に終止符を打ち、新たな歴史を歩み始めた。明治維新の文明開化、諸制度の改革とともに新政府がいち早く取り組んだのが近代的な郵便制度の導入であった。山梨県下への郵便制度の浸透は全国的にも早い方であった。静岡県吉原と甲府の間に初めての郵便の経路が開かれ、月々16日を発送日に決め、柳町取扱所の郵便書状箱へ投函することにした。しかし当初はなかなか徹底せず、新しい制度の普及に苦労したようだ。

写真提供:山梨日日新聞社(大正から昭和初期にかけての錦町・常盤交差点。左の建物が甲府郵便局)

るものであった。翌明治5年(1872)には甲府柳町の飛脚問屋・加藤源六郎宅に甲府郵便取扱所がつくられた。現在の甲府銀座通りの東入口付近にあったと言われている。まもなく、この甲府郵便取扱所を中心に、県内各地で郵便の利便性を上げるため、市川大門、石和、勝沼、下初狩、上谷村、下鳥沢、上野原の7カ所に取扱所が設けられた。また、政府の力だけでは県下に

くまなく郵便局を設けることは難しかったことから、各地の名士に協力を仰いで郵便取扱所を作る土地と建物を提供してもらう特定郵便局制度により、全県下に郵便制度を浸透させていった。各地に残るモダンな建築の郵便局は、人々にとって文明開化の象徴だけに違いない。

郵便制度の功績者に 本県出身の杉浦譲も

郵政事業百年を記念する頃、多くの県民が広く知ることになったのは、郵政事業の始まりに貢献した本県出身の杉浦譲(すぎうらゆずる)の存在であった。甲府勤番同心から身を興し、旧幕府外国奉行に仕えながら渡仏を重ねた俊才である。維新とともに初代の駅通正に任ぜられ郵政事業の総

帥として腕をふるった。全国津々浦々にまで届く情報、新制度の実現は彼の夢でもあった。山国の山梨にいち早く郵便の経路が開かれたのも、杉浦の見識によるところが大きかったといわれる。

今も残る昭和初期の 甲府郵便局舎

ボロ電と呼ばれる県民の足として愛された山梨交通電車線が、県民会館の脇から錦通りを下り、繁華な交差点にさしかかる懐かしい写真がある。東に旧勧業銀行、西南に甲府警察署、そして西北の角にあったのが、かつての甲府郵便局の建物であった。通信省の技師・山田護の設計による鉄筋コンクリート造2階建のモダンな近代建築、昭和6年(1931)に竣工した。周囲

全国一律料金の新しい 郵便制度始まる

新しい国家体制を急速につくりあげなければならなかった維新政府にとって、近代的な郵便制度を整備し政府自らが運営することが、統一国家として急務の課題であった。明治4年(1871)8月、駅通頭(えきていのかみ)に就任した前島密(まえじまひそか)は先進諸国の制度を導入し、近代国家にふさわしい新たな郵便制度を構想。強力なリーダーシップで、まず明治4年4月に東京と大阪の間に最初の郵便の経路が開かれた。鉄道のように、中央から徐々に地方へ広げていけばよいもの、と違い、全体が機能して初めて意味を持つ郵便制度は、運搬も営業もそれまでの施設を部分的に使いながらも、この時期に一挙に全国ネットワークを立ち上げ、配送にかかる時間を著しく短縮させた。それまでの飛脚による配送ではまちまちであった料金も、郵便制度では全国一律となり、初めての切手も発行された。

県下で初めての郵便経路線

県下で初めての郵便の経路が開かれたのは、明治4年(1871)11月。甲府から静岡の吉原までを結び、そこから東京と大阪間のネットワークに繋がは市役所、裁判所が隣接する官庁街をなす一角。昭和49年(1974)に現在の太田町に移るまで、戦中戦後を通じて長らく甲府の中心にあった印象的な風景であった。改装を繰り返し、角の入り口は閉ざされているが、現在もお甲府市役所の南庁舎として使われている。



上九一色郵便局。明治の郵便局の建物が今も保存されている。

昭和10年ごろの甲府郵便局。当時錦通りにはボロ電が走っていた。郵便局の建物は現在甲府市役所南庁舎として使われている。